

普及活動現地情報 「農業現場では、今」

令和2年9月号



【東牟婁振興局】重点プロジェクト【新規就農者の育成を核としたイチゴの産地育成】
～みくまの産地協議会の新規就農受入研修スタート～

和歌山県農林水産部経営支援課

(農業革新支援センター)

はじめに

普及活動現地情報は、普及指導員等が行う農業の技術普及、担い手育成、調査研究、地域づくり等の多岐に渡る現場普及活動や、運営支援を行っている関係団体の活動、産地の動向等、その時々々の旬な現場の情報をとりまとめたものです。

それぞれの地域毎の実情に応じて、特徴ある普及活動を展開していますので、是非、御一読頂き、本情報を通じて、普及活動に対する御理解を深めて頂くと共に、関係者の皆様にとって、今後の参考になれば幸いです。

また、本情報については、カラー版（PDF ファイル）を和歌山県ホームページ内（農林水産部経営支援課：アドレスは下記を御参照下さい。）に掲載しており、過去の情報も閲覧出来ますので、併せて御活用下さい。

和歌山県農林水産部経営支援課ホームページ 普及現地情報アドレス

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070900/hukyu/>

検索サイトより、以下のキーワードで御検索下さい。



< 目 次 >

頁数

I 海草振興局	1 - 2
1. 重点プロジェクト【次世代につなぐ下津みかん産地への取り組み】 ～海南・下津農業の将来を考えるワーキングチーム会議を開催～	
2. 重点プロジェクト【次世代につなぐ下津みかん産地への取り組み】 ～普通温州優良系統調査園の巡回調査を実施～	
3. スマート農業実践塾（果樹コース）を開催	
II 那賀振興局	3 - 4
1. イチゴの花芽検鏡を実施	
2. 「ねごろ大唐」の出前授業を実施	
III 伊都振興局	5
1. 新規就農者研修会（秋冬野菜栽培研修会）を開催	
IV 有田振興局	6 - 7
1. 有田地方4Hクラブ連絡協議会が摘果講習会を開催	
2. カメムシビーターティング調査を実施	
V 日高振興局	8 - 10
1. 重点プロジェクト【新病害虫や梅干し生産への特化のリスクに強い 梅産地づくり】 ～梅新品種「星秀」の高接ぎ～	
2. スターチスの種苗費削減に向けて	
3. スマート農業実践塾（果樹コース）を開催	
VI 西牟婁振興局	11 - 14
1. 重点プロジェクト【気象条件等に対応した果樹産地の振興】 ～温州ミカン「YN26」栽培実証園の収穫調査～	
2. 稲成いちご研究会が栽培圃場の巡回調査及び意見交換会を実施	
3. JA紀南ミョウガ研究会が栽培研修会を開催	
4. 中辺路町生活研究グループがお菓子作りの研修会を開催	
VII 東牟婁振興局	15 - 17
1. 重点プロジェクト【新規就農者の育成を核としたイチゴの産地育成】 ～みくまの産地協議会の新規就農受入研修スタート～	
2. 重点プロジェクト【新規就農者の育成を核としたイチゴの産地育成】 ～イチゴ花芽検鏡研修（第3回イチゴセミナー）を実施～	
3. 那智勝浦町の小学生がナスの収穫と袋詰めを体験	

I 海草振興局

1. 重点プロジェクト【次世代につなぐ下津みかん産地への取り組み】 ～海南・下津農業の将来を考えるワーキングチーム会議を開催～

9月4日、海南・下津地域の農業を将来に継承していくため、平成30年度に設置した「海南・下津農業の将来を考えるワーキングチーム」の今年度第1回会議がJAながみねしもつ営農生活センターで開催された。会議には、農業者代表として下津町農業士会(榎本友紀会長)、下津町農業研究会青年同志会(杉本博基会長)、JAながみね柑橘部(岡畑浩二会長)と下津町内援農主催者大谷幸司氏及び海南市産業振興課、JAながみね、農業水産振興課の担当職員が出席した。

今回は、下津オリジナル援農体制や新型コロナウイルス感染防止対策を踏まえた今年度の援農者受入に係る注意点等について検討し、ワーキングチームで新型コロナウイルス感染防止対策に関するチラシを作成することとなった。また、当課から3年計画の最終年を迎えた標記重点プロジェクトのこれまでの取り組みと今後の予定について説明し、普及活動への協力を呼びかけた。

今後もワーキングチームでは農業者等を交えた会議を定期的で開催し、農業現場の課題や解決策について活発な意見交換を行いながら、海南・下津地域農業の維持発展につながる取組を地域に提案していく。



ワーキングチーム会議

2. 重点プロジェクト【次世代につなぐ下津みかん産地への取り組み】 ～普通温州優良系統調査園の巡回調査を実施～

農業水産振興課では、平成30年度からJAながみねと連携して下津地区特産の「蔵出しみかん」に適した新たな品種を探索することを目的に、海南市下津町内で栽培されている普通温州優良系統等の品質調査及び貯蔵試験を実施している。

今年度も、9月14日にJAながみね職員と優良系統栽培園(高接:6園、苗木:3園)を巡回し、果実の着果状況等について調査を実施した。その結果、系統により着果量に差はあるものの、各系統とも調査用果実の確保は可能であることが確認できた。今後も、JAながみねと連携し12月中旬から果実品質や貯蔵性などの調査を開始する。



果実の着果状況

3. スマート農業実践塾（果樹コース）を開催

9月10日、県主催によるスマート農業実践塾（果樹コース）を海南市下津町上で開催し、海草管内の農業者及び関係者等 21 名（うち管内新規就農者研修果樹コースメンバー5 名）が出席した。今回は、(株)東海近畿クボタから講師を招き、リモコン式草刈機及びアシストスーツの操作について講習会が行われた。

まず、リモコン式草刈機 3 機種とアシストスーツ 1 機種の特徴について説明を受けた後、4 グループに分かれ、それぞれの操作演習を行った。

参加者からは、性能等についての質問や「アシストスーツは楽に作業できるけど、使い方に慣れるかな」、「平坦な園地ならリモコン式草刈機が使えるかも」、「導入したい」などの声が聞かれた。

今後も当課では、農業者にスマート農機について認識を深めてもらうことを目的に、引き続き現地研修会を実施していく。



草刈機操作演習



アシストスーツ操作演習

Ⅱ 那賀振興局

1. イチゴの花芽検鏡を実施

8月31日～9月25日（計7回）にJA紀の里打田支所ふるさとセンターにおいて、那賀地方いちご生産組合連合会（勢田道子会長）主催でイチゴの花芽検鏡を実施した。

イチゴの花芽検鏡は、顕微鏡で花芽分化を確認する作業で、定植時期の目安を知ることができる。特に和歌山県育成品種「まりひめ」は、花芽が未分化の状態ですと定植をした場合、開花がかなり遅れる傾向があるため、花芽分化を確認してから定植する必要がある。

本年度は、会員が持ち込んだイチゴ苗229株について、JA紀の里営農指導員2名と農業水産振興課職員2名で、顕微鏡を用いて花芽が分化しているかを確認し、適期定植の助言、指導を行った。



花芽検鏡の様子



定植風景

2. 「ねごろ大唐」の出前授業を実施

9月15日、農業水産振興課では岩出市立中央小学校5年生83人を対象に岩出市特産のねごろ大唐について出前授業を実施した。

この授業は、子供たちが地域農業に対する理解を深めることを目的に栄養教諭と連携して行っており、講師はJA紀の里ねごろ大唐部会の中村和史会長が務めた。

本授業は当初6月開催予定だったものが新型コロナウイルス感染症の影響を受けて延期となり、しばらくは授業実施の目途が立たなかったが、その間、栄養教諭と当課職員が数回中村氏を訪ねて農作業についての聞き取りや栽培施設内を撮影するなど、実施に向けての準備を重ねてきた。

当日は、まず児童に地域で栽培されている農産物を発表してもらい、中村講師からお話をいただいた。

中村講師からは、栽培する際には辛みが出ないように温度管理に気を付けていること、虫よけにマリーゴールドを植えていること、名前が「根来寺の大塔」に由来するなどの話があり、児童たちは興味深く聞き入っていた。

その後、児童に「ねごろ大唐」の実物を手に取って見てもらい、大きさや形を確認した。試食を予定していた『ねごろ大唐じゃこ昆布炒め』については、新型コロナウイルスの影

響で実現できなかったため、代わりに調理手順を動画で説明し、児童が家庭で挑戦できるようレシピを配布した。

授業を受けた児童からは「シシトウと比べ、ねぎろ大唐が大きくてびっくりした」、「給食にもたくさんねぎろ大唐が使われていることが分かった」、「ねぎろ大唐を買ってもらい、家で炒め物を作ってみたい」といった声が聞かれた。

今回の出前授業を通じ、子供たちが地域農業への理解を深めるとともに、食べ物を育てている人の努力や苦勞を知ること、食べ物を大切にしようとする感謝の気持ちが醸成されることを期待している。



中村講師による説明



「ねぎろ大唐」の実物を観察

Ⅲ 伊都振興局

1. 新規就農者研修会（秋冬野菜栽培研修会）を開催

9月1日、農業水産振興課では、新規就農者の栽培技術向上と相互交流を図るため、野菜をテーマにした新規就農者研修会を開催し、6名が受講した。

最初に受講者一人一人から栽培品目や経営目標など自己紹介を行った。続いて、久保普及指導員からハクサイ、キャベツ、タマネギなど秋冬野菜の栽培のポイントや病害虫の防除について説明した。

受講者からは、施肥方法やタマネギの病害虫防除方法についての質問があった。

当課では、今後とも新規就農者の技術力の向上を目的とした研修を行っていくとともに、相互の交流を深めるための支援を行っていく。



研修会

IV 有田振興局

1. 有田地方4Hクラブ連絡協議会が摘果講習会を開催

9月10日、有田地方4Hクラブ連絡協議会（石川裕基会長）主催の摘果講習会が有田川町丹生の4Hクラブ員ほ場で開催され、各市町から4Hクラブ員及び関係者19名が参加した。

今回の研修会は、温州みかんの生産技術向上を目的として、JAありだ吉備営農センター北野佑営農指導員を講師に迎え、仕上げ摘果の方法について技術解説を受けた。

まず、今年の天候の特徴と果実品質の状況について説明があり、これからの摘果の目的や、摘果すべき果実の説明、摘果する量や着果場所について実演を交えながら説明があった。

あいにくの天候となったが、参加した4Hクラブ員からは、「樹齢や樹勢の違いにより摘果量は変えるのか」、「葉果比はどの程度とするのか」などの質問があり、熱心な質疑応答が行われた。

今後も農業水産振興課では若手生産者の栽培技術向上や交流について支援を行っていく。



仕上げ摘果の解説



熱心な質疑応答

2. カメムシビーティング調査を実施

9月9日、カメムシビーティング調査を有田農業技術者会（上野山浩司会長（農業水産振興課普及グループGL））の構成員11名で実施した。

有田農業技術者会は、有田地方の農業の発展・振興を目的として活動している団体で、JAありだ、JAグループ和歌山農業振興センター、NOSA Iわかやま中部支所、有田川土地改良区、有田中央高校、近畿大学附属農場湯浅農場、県果樹試験場、有田振興局農業水産振興課で構成されている。

調査は、広川町と有田川町の山林15カ所で実施し、捕獲したカメムシの数とエサとなるスギヒノキ球果（きゅうか）の数から今後の樹園地への飛来量を予想する。

結果は、全体でカメムシの成虫6匹（チャバネアオカメムシ4匹、ツヤアオカメムシ2匹）、幼虫（チャバネアオカメムシ）1匹の捕獲数であり、昨年度（成虫2匹、幼虫1匹）並みに少なく、球果の数も少ない状況であった。このことから今後の樹園地への飛来数は少ないと予測された。

この結果を生産者に情報提供するとともに、高品質生産に向けた技術指導を引き続き行う。



捕虫網によるカメムシビーティング調査

V 日高振興局

1. 重点プロジェクト【新病害虫や梅干し生産への特化のリスクに強い梅産地づくり】

～梅新品種「星秀」の高接ぎ～

県うめ研究所で育成された「星秀」は、「黒星病」へ抵抗性を有する自家和合性品種で、梅干し等の加工適性も優れている。「南高」よりやや小さいものの同時期に育成された「星高」より果実が大きく、「黒星病」の抵抗性も高いことから、生産者等から特に注目されている。

9月29日、梅生産者、JA紀州と農業水産振興課から7名が参加し、みなべ町山内地区の「南高」6年生樹(10本)に「星秀」の高接ぎを行った。今回は、JA、県の若手職員等の技術向上を図るため、接ぎ木研修も兼ねて行った。

なお「星高」については、昨年秋に同園地に高接ぎを行っており、現在順調に生育している。

次年度からは、「星高」、「星秀」実証展示ほとして、果実品質、収量等の調査を行うとともに生産者へ普及を図っていく予定である。



接ぎ木研修



高接ぎ研修



「星秀」高接ぎ

2. スターチスの種苗費削減に向けて

日高地方の主要品目であるスターチス生産では、種苗費が生産経費の約 40%を占めており、所得向上を図るためには種苗費の削減が課題となっている。このため、農業水産振興課では、暖地園芸センターが開発した「スターチス常温育苗技術」導入による種苗費の削減を推進するため、管内 2カ所で現地実証を行っている。

実証試験には、本県のオリジナル品種「紀州ファインバイオレット」、「紀州ファインラベンダー」を用い、暖地園芸センターで常温育苗^{注)}した苗と農家が育苗したクーラー育苗苗をそれぞれ 8月下旬と 9月上旬に定植し、生育状況を調査している。9月 29日時点で、紀州ファインバイオレットでは常温育苗株はクーラー育苗株に比べ、株径は約 10cm 大きく、葉数は約 17 枚多い結果となっている。実証ほの園主からも「常温育苗苗は活着が良く、生育が良い。」との感想をいただき、生育初期の株は順調である。

今後、現地実証にて実用性を確認するとともに、当該技術のきめ細かい情報提供及び現場普及に向けた課題の抽出を行っていく予定である。

注) 遮光を施した雨よけ施設下の気温で苗を育てること



実証ほの生育状況

(左：クーラー育苗株、右：常温育苗株)

3. スマート農業実践塾（果樹コース）を開催

9月16日、県主催による標記講習会を日高川町小熊地区で開催し、農業者及び関係者ら13名の参加があった。今回は、(株)東海近畿クボタを講師に招き、リモコン式草刈機3機種とアシストスーツの操作講習が行われた。参加者を4グループに分けてローテーションで全機種を体験する方式としたため、参加者はじっくりと体験することができた。

リモコン式草刈り機については、「思ったよりも操作が簡単」、「作業が楽になる」との感想が聞かれる一方、3機種ともに一長一短があり、より果樹園に適合した新機種の開発を求め声が多かった。

アシストスーツでは、今回の体験機種がコンテナ等を引き上げるアシスト機能が付いたタイプであったため、足腰へのアシストとウインチのスイッチ操作のタイミングに慣れない参加者が多かったが、次第にコツをつかんでいた。

今回の研修を通じ、スマート農機の効率的な運用を図るためには、より果樹農業に適した新機種の開発、効率的な運用を行うための圃場環境整備や作業体系の見直しが必要であることを参加者は感じていた。



リモコン式草刈機の操作講習



アシストスーツ体験

VI 西牟婁振興局

1. 重点プロジェクト【気象条件等に対応した果樹産地の振興】

～温州ミカン「YN26」栽培実証園の収穫調査～

減酸が早く食味の良い極早生ミカン「YN26」のブランド果実「紀のゆらら」の生産割合を高め、農業所得の向上を図るため、上富田町岡に栽培実証園（6a、60本、8～9年生樹）を平成24年に設け、栽培研修会や高品質栽培実証を継続して実施している。

今年は開花後の生理落果が多く着果量が少なかったため、摘果は行わなかった。9月17日に1回目の収穫を行い、園主と農業水産振興課の前田普及指導員が調査を行った。

果実肥大は、毎月2回の調査結果では平年並みで、選果データではM果の割合が42.9%と最も多く、次にS果が36.3%で出荷量の約8割を占めていた。一方、着果量が少ない樹で果皮の粗い着色不良果や日焼け果が多く、規格外や加工柑が全収穫量の約3割を占めるなど、着果安定対策が課題として浮き彫りとなった。実証園を設置して8年目の収穫量（10a当たり換算）は、約3,120kgで、樹容積の拡大とともに順調に増加している。

果実品質は、糖度はほぼ平年並みで推移し、クエン酸は始め平年より低く、最終的には平年並みとなった。「紀のゆらら」の条件である糖度10度以上、クエン酸1%未満の果実の合格率は、出荷量の約3割と地域の平均と同等の結果であった。

当課では、これらの結果を基に高品質果実生産の技術資料を作成するとともに、今後とも「YN26」栽培面積の拡大と「紀のゆらら」の生産量増加により、農家所得の向上に向けた支援に関係機関と連携して取り組んでいく。



「YN26」実証園 着果状況



収穫調査（9/17）

2. 稲成いちご研究会が栽培圃場の巡回調査及び意見交換会を実施

稲成いちご研究会（宮本誠士会長）は、県オリジナル品種「まりひめ」の栽培技術の高位平準化と高品質安定生産を図るため、毎年、定植前（9月）と共同出荷前（12月）の2回、栽培圃場の巡回調査及び意見交換会を行っており、9月11日に研究会会員5名、JA紀南営農指導員等の職員3名、農業水産振興課の谷普及指導員の9名が参加した。

はじめに、JA紀南の販売担当職員から令和元年度産の販売実績や今年度新たに取り組む大阪市場向けの出荷容器や段ボールの規格の変更点について説明があり、変更した際の問題点について意見交換を行った。

続いて、谷普及指導員から昨年度実施した天敵利用によるイチゴのハダニ防除試験の結果報告や、病害虫防除対策について資料をもとに説明した。

会員からは「天敵は以前導入したが、あまり効果を実感できなかった。この試験結果では効果が期待できるので、再度使ってみたい」、「今のところ薬剤防除で対応出来ているが、効果のある防除薬剤がなくなってからでは遅いので導入を検討したい」、「天敵導入時の注意点や、天敵に影響のある薬剤について詳しく教えて欲しい」等の意見や感想があった。

その後、会員の栽培圃場を巡回調査し、苗の生育や病害虫の発生状況を確認した。

当課では今後ともJA紀南と連携し、イチゴ栽培技術の高位平準化や高品質安定生産に向けて、圃場の巡回調査や意見交換会で情報を共有するなど、同研究会の活動を支援していく。



出荷規格の変更について意見交換



イチゴ苗の生育確認

3. J A紀南ミョウガ研究会が栽培研修会を開催

9月8日、J A紀南ミョウガ研究会（山本晃一会長）は、栽培技術の向上を図るため、生産者7名、J A紀南営農指導員等2名、農業水産振興課の谷普及指導員が参加し研修会を開催した。

ミョウガは、梅など果樹との複合経営品目のひとつとして、田辺市の山間部において栽培され、主にJ A紀南で塩漬け（一次加工）を行い、県外の漬け物加工業者へ販売されている。

研修会では、出荷時の注意点についてJ A紀南販売担当者から説明があり、続いて、昨年度から取り組んでいるミョウガ根茎腐敗病に対する薬剤防除実証試験の内容とこれまでの経過について、J A紀南の中地営農指導員及び谷普及指導員から説明を行った。

試験圃場の園主からは、「薬剤散布することで病害の発生はかなり抑えられているように思う。特に病害発生圃場から採取した種根茎を消毒して別の圃場へ植え付けて2年目だが、今のところ病害は発生していない。薬剤散布の効果はあると思う」と試験圃場の状況について報告された。他の会員からは、「今のところ圃場で病害の発生は見られないので、薬剤散布等の防除対策は行っていないが、発生すると大変なので、植え付け時に種根茎の消毒はしたい」、「ミョウガに使用できる薬剤は限られていて値段も高いので、回数を多く使用できない。防除時期（回数）の検討や薬剤散布以外に取り組める対策はないか」、「ミョウガは水はけが良く、直射日光が当たらないなど植え付ける圃場条件も重要だ」など多くの意見が出された。

その後、実証試験圃場へ移動し、ミョウガの生育やミョウガ根茎腐敗病の発生状況を確認した。

当課では、ミョウガ研究会やJ A紀南と連携しながら、引き続きミョウガ根茎腐敗病に対する薬剤防除実証試験に取り組み、本病の防除体系と高品質なミョウガ栽培技術の確立を支援していく。



薬剤防除実証試験内容の説明



現地実証圃場での検討

4. 中辺路町生活研究グループがお菓子作りの研修会を開催

9月14日、中辺路町生活研究グループ連絡協議会（森川敏子会長）が、中辺路コミュニティセンターにおいて、コロナウイルス感染防止対策をとりながら料理研修会を開催した。会員7名が参加し、「レアチーズケーキ」、「水もち」、「カボチャのおやき」の3品を作った。若手の会員が講師を務め、インターネットで調べたレシピをもとに作り方の手順を説明した。

参加者は、「チーズケーキを始めて作ったが、思ったより簡単できれいにできた」、「かぼちゃのおやきは栄養満点」と出来栄えに大満足であった。今回できあがった料理の試食は皆で行わずにそれぞれが持ち帰ったが、会員らは久しぶりの会活動で楽しい時間を過ごした。



研修会の様子



レアチーズケーキ



カボチャのおやき

Ⅶ 東牟婁振興局

1. 重点プロジェクト【新規就農者の育成を核としたイチゴの産地育成】

～みくまの産地協議会の新規就農受入研修スタート～

みくまの産地協議会（漆畑繁生会長）は、わかやま版新規就農者産地受入体制整備支援事業を活用し、新規就農受入研修を9月から開始した。

新規就農研修生（第1回みくまの産地面談会にて選抜）は、9月1日から令和3年8月31日まで、JAみくまのトレーニングファームにおいて農業基礎知識や営農予定品目であるイチゴの栽培技術等を習得する。

さっそく、新規就農研修生は、9月18日、23日の第3回イチゴセミナーの「イチゴの花芽検鏡研修会」に参加し、イチゴの花芽形成と苗定植の適正時期を学んだ。さらに、くろしお苺生産販売組合の農家でイチゴ苗定植の実践研修を受けた。

今後も当課は、みくまの産地協議会と連携し、当協議会策定の「イチゴ新規就農支援プログラム」を活用した新規就農受入研修を進めるとともに、新たな就農希望者の受け入れ体制整備を進めていく。



JAみくまのトレーニングファーム



くろしお苺生産販売組合農家でのイチゴ定植研修

2. 重点プロジェクト【新規就農者の育成を核としたイチゴの産地育成】

～イチゴ花芽検鏡研修（第3回イチゴセミナー）を実施～

9月18日、23日、くろしお苺生産販売組合(栗野稔近会長)は、イチゴの花芽検鏡研修会(第3回イチゴセミナー)を開催し、生産者12名(内新規就農者4名、新規就農研修生1名)、JAみくまの職員1名、農業水産振興課3名が参加した。

イチゴの花芽検鏡は、花芽の分化程度を確認することで、定植時期の決定や出蕾・収穫時期の予想をするための重要な作業である。

当日は、坂井普及指導員が花芽検鏡の必要性と方法について説明を行った後、研修生が「まりひめ」を用いて花芽検鏡の実習を行った。

参加した研修生からは、「検鏡の大切さが分かった」、「一人でも花芽分化を見られるようになりたい」などの感想があり、有意義な研修となった。

また花芽検鏡の結果、分化がやや遅れていたことから、定植時期を遅らせる指導を行った。

当課では、関係機関と連携しながら、栽培技術の向上や新規就農者の育成など、くろしお苺生産販売組合の活動を支援していく。



花芽検鏡方法の説明（新規就農研修）



花芽検鏡方法の実習（新規就農研修）

3. 那智勝浦町の小学生がナスの収穫と袋詰めを体験

9月14日、那智勝浦町立下里小学校年生19人が、同町南大居でナスの収穫体験を行った。

この取組は、新宮周辺地場産青果物対策協議会（小田三郎会長）が中心となり、地産地消推進活動の一環として小学生を対象に開催している。

児童たちは、ナス圃場で杉浦仁氏（同対策協議会会員）から収穫の方法や注意点について説明を受け、その後、杉浦氏のアドバイスに従い、実のなったナスの株から傷ついていない大きな実を探して1個ずつはさみで収穫した。1人あたり5個のナスを収穫した。

収穫後、児童たちはJAみくまの太田営農センター集出荷場で、収穫したナスから形や大きさのそろった果実3個を選別し袋詰めし、店頭で並べられる状態にした。

袋詰め終了後の質問の時間には、児童から「ナスはどのように植えるのか?」、「ナスはどのようにして紫色になるのか?」、「ナスはなぜ「ナス」と言うようになったか?」など質問が多くあり、杉浦氏が身振りを交えながら丁寧に回答した。

袋詰めしたナスは家に持って帰り、それぞれ試食する予定である。

当課では、今後も当協議会の活動を支援していく。



ナスの収穫方法の説明



はさみを使ってナスを収穫

普及活動現地情報 発行・編集

和歌山県農林水産部経営支援課	TEL073-441-2931	FAX073-424-0470
海草振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL073-441-3377	FAX073-441-3476
那賀振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0736-61-0025	FAX0736-61-1514
伊都振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0736-33-4930	FAX0736-33-4931
有田振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0737-64-1273	FAX0736-64-1217
日高振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0738-24-2930	FAX0738-24-2901
西牟婁振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0739-26-7941	FAX0739-26-7945
東牟婁振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0735-21-9632	FAX0735-21-9642
和歌山県農林大学校	TEL0736-22-2203	FAX0736-22-7402
和歌山県農林大学校就農支援センター	TEL0738-23-3488	FAX0738-23-3489